

St. Luke's International University Repository

Career and Life Plan Support Project(CLIP) in 2019 Cultural Similarities and Differences: Beginning with the Birth of a Baby

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-19 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 五十嵐, ゆかり, 岡, 美雪, 下田, 佳奈, 馬場, 香織, 大塚, 公美子, 丸田, 和美, 間宮, 万貴, 加藤, 雛子, 檀上, 明佳, 渡邊, 恵美里, Igarashi, Yukari, Oka, Miyuki, Shimoda, Kana, Baba, Kaori, Otsuka, Kumiko, Maruta, Kazumi, Mamiya, Maki, Kato, Hinako, Danjo, Haruka, Watanabe, Emiri メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.34414/00000119

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



短 報

2019 Career and Life Plan Support Project (CLIP) 実践報告 いろいろな国の同じこと・違うこと

—いのちのはじまりから学んでみよう—

五十嵐ゆかり¹⁾ 岡 美雪¹⁾ 下田 佳奈¹⁾ 馬場 香里¹⁾ 大塚公美子²⁾
丸田 和美²⁾ 間宮 万貴²⁾ 加藤 雛子²⁾ 檀上 明佳²⁾ 渡邊恵美里³⁾

Career and Life Plan Support Project (CLIP) in 2019 Cultural Similarities and Differences —Beginning with the Birth of a Baby—

Yukari IGARASHI¹⁾ Miyuki OKA¹⁾ Kana SHIMODA¹⁾ Kaori BABA¹⁾ Kumiko Otsuka²⁾
Kazumi MARUTA²⁾ Maki MAMIYA²⁾ Hinako KATO²⁾ Haruka DANJYO²⁾ Emiri WATANABE³⁾

[Abstract]

The program 'Cultural Similarities and Differences Beginning with the Birth of a Baby' was accepted by the Hirameki Science Program, Welcome to University Laboratory- (*Kakenhi*), in 2019. We implemented the program designed for 5th and 6th grade school children. The purpose of the program was to foster children's sensitivity and to have better understanding of multi and cross-cultural society by learning their different points of view. The program used an active learning style; the participants were expected to learn by lecture and discuss the topics covered in the program, such as the birth of a baby. In the results of the questionnaire, both participants and parents were highly satisfied. Some participants commented that their understanding of the preciousness of life as well as cross-cultural understanding had deepened. As for the points to be improved in the future, it is necessary to consider ways in which participants can participate more proactively. We need to consider ways to market this program to gain an even balance between the number of boys and girls. The results indicate that this program is good to continue in the future, as changing the target age group, and creating a program for each target.

[Key words] Multi-Cultural Society, Cross-cultural understanding, Childbirth, Childbearing, Educational Program

[要 旨]

2019年度ひらめき☆ときめきサイエンスようこそ大学の研究室へ～KAKENHI～に「いろいろな国の同じこと・違うこと—いのちのはじまりから学んでみよう—」が採択され、小学生対象に企画したプログラムを実施した。プログラムの目的は、多文化共生への感受性を育み異文化理解の促進、文化の普遍性や多様性を知ること、とした。内容は、午前中はいのちのはじまりに関連する参加型の講義と演習を行い、

-
- 1) 聖路加国際大学大学院看護学研究科・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing
 - 2) 聖路加国際大学大学院看護学研究科(修士課程)・St. Luke's International University, Graduate School of Nursing, Master program
 - 3) 社会医療法人河北医療財団河北総合病院・Social Medical Corporation Kawakita Medical Foundation, Kawakita General Hospital

午後は在住外国人女性による出産や育児体験の講義と交流を中心とした。アンケート結果では、参加者・保護者ともに満足度が非常に高かった。また、異文化理解だけでなく、命の尊さへの理解が深まったとコメントした参加者もいた。今後の改善点は、参加者がより主体的に参加できる工夫や参加男女数のバランスが均等になる募集広報の検討が必要である。今後もプログラムを継続するとともに、対象の年齢層も変え、各対象に合わせたプログラムの作成も行っていきたい。

【キーワード】 多文化共生, 異文化理解, 出産, 育児, 教育プログラム

I. はじめに

Career and Life Plan Support Project (CLIP) とは、様々なバックグラウンドをもつ子どもたちにライフプラン作りを支援するプロジェクトで2017年に開始した。主な活動は、リプロダクティブヘルス向上のための性教育(妊娠経過, 避妊, 産後の育児, 性感染症の予防など)、健康維持の方法, 妊産褥婦への支援の方法を学びつつ医療の仕事を知るなどのプログラムを展開している。今回は、日本学術振興会の2019年度ひらめき☆ときめきサイエンスようこそ大学の研究室へ～KAKENHI～が採択され、小学生対象のプログラムを行った。その実践活動について報告する。

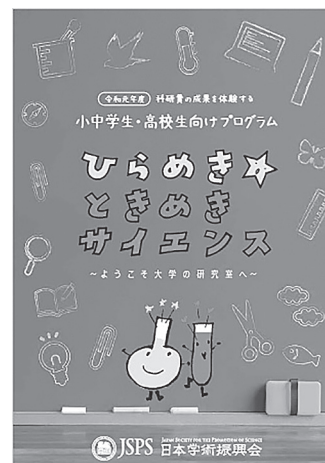


図1. 日本学術振興会のパンフレット

II. ひらめき☆ときめきサイエンスようこそ大学の研究室へ～KAKENHI～とは

大学や研究機関で「科研費」により行われている最先端の研究成果に、小学5、6年生、中学生、高校生の参加者が、直に見る、聞く、触れることで、科学のおもしろさを感じてもらおうプログラムである。そして、将来に向けて、参加者の科学的な好奇心を刺激して「ひらめき」「ときめく」心の豊かさや知的創造性を育む内容を目指している。研究者は「科研費」による独創的・先駆的な研究について、その中に含まれる科学の興味深さや面白さを講義、実験等を通じて分かりやすく説明し、さらに学問の素晴らしさや楽しさを伝えることも目的としている。つまり、研究者がこれまで行った研究を基盤としたプログラムを展開することで、参加者の学問や研究への興味関心を高めることを目指している¹⁾(図1)。

III. プログラムの実際

1. 基盤となった研究とその成果

著者の科学研究費での研究で、今回のプロジェクトの基盤となった研究は、2011年度-2012年度若手研究B(課題番号:23792672)「多文化共生社会に望まれる外国人ケアを習得するための周産期看護者教育プログラム」と、2013年度-2015年度 基盤研究C(課題番号:25463523)

「多文化共生社会の感受性を育む周産期看護者育成プログラムの実施と評価」であった。研究結果から、医療者は多様な背景を持つ人々との関わりが少ないため外国人患者への対応に戸惑い、そのことがトラブルに発展しているという現状があった。そのため、医療者に外国人対応のプログラムを提供し、特にコミュニケーション演習を中心に実施した。その結果、外国人に対応する恐怖や躊躇が軽減し、外国人とのコミュニケーションに自信が持てた、などの評価を得た。また、「外国人対応の向上のために、日常的にも外国人の方にかかわる機会を作ろうと思う」「困っている人を見かけたら無視せずに積極的に声をかけていきたい」などのコメントがあった。これらの研究結果より、外国人に対する苦手意識が固定化する前の早い時期に多文化共生が日常となる環境があることが必要であると再認識し、また多様な背景を持つ人々との共生により得られる異文化を知る魅力を体験してほしいと考えたため、小学生にプログラムを提供することとした。

2. 目的

今回のプログラムの目的は、ひとつめは、在住外国人人口の増加から、今後の多文化共生社会を見据え小学生の時期に多様な背景を持つ人々とコミュニケーションをとることによって、多文化共生への感受性を育むとともに異文化理解につなげること。ふたつめは、出産という

テーマを通じて、出産に関する解剖生理学的な知識を得るとともに妊娠や新たな命が生まれることから文化の普遍性を知り、出産にまつわる文化儀礼などから文化の多様性を知ること、とした。そして、プログラム名は「いろいろな国の同じこと・違うことーいのちのはじまりから学んでみようー」とした(図2)。今回の対象は、小学5・6年生の男女とし、保護者の参加は自由とした。また、グループ編成を考え、定員は30名とした。

3. 当日までの準備

日本学術振興会の専用のウェブページにて、プログラムの概要の掲載とともに受付申し込みを行った。また本学のホームページにもプログラムを掲載した。その結果、受付申し込み開始から数日で定員数に達した。

4. 当日のスケジュール

開催は、聖路加国際大学大村進・美枝子記念聖路加臨床学術センターの2階と4階で行った。表1は実際のスケジュールである。

5. 実施に際し配慮した点

参加者は当日に初めて出会った者同士であるため、各グループにファシリテーターを2名ずつ配置して、グルー



図2. プログラムのロゴ

表1. 当日のスケジュール

<p>〈午前〉 開校式(オリエンテーション, 科研費の説明) グループ内での自己紹介 講義「科研の成果1:日本における在住外国人女性の出産体験」 講義「科研の成果2:多文化共生の感受性を高めるプログラム」 演習 子宮の中クイズ 演習 胎児モデル/妊婦ジャケットでの体験</p>
<p>〈午後〉 演習「在住外国人女性のお話」 中国, タイ, インドネシア出身の女性 演習「在住外国人女性のお話」 アメリカ, フィリピン出身の女性 クッキータイム 講義 同じこと・違うことのまとめ・質疑応答 閉校式 未来博士号授与式, アンケート, 解散</p>

プ内のコミュニケーションをサポートするとともに、全てのアクティビティに全員が参加できるように配慮した。午前は特にグループ内でのディスカッションを増やしてコミュニケーションが活性化するようにし、グループメンバー同士で話すことへの羞恥心を軽減することに注力した。

プログラムの構成では、グループ内ディスカッションのあとは、グループ同士のディスカッションを行い、他のグループで話し合った内容を共有する機会も作り、異なる考えや視点を学ぶことができるようにした。また、演習で体感する前後にはクイズや講義などを行い、正しい知識を提供するとともに知識の定着を図った。在住外国人女性のプレゼンテーションでは、講義を聞くだけではなく交流の時間をもって、直接コミュニケーションをとる体験をしたり、疑問や異なる文化の習慣などを直接質問する機会を設けたりした(図3, 4, 5, 6, 7)。

6. 参加の実際

当日の参加者は25名(小学5年生11名, 小学6年生14名, 体調不良などのため5名欠席)で、女兒は22名, 男児は3名であった。保護者はきょうだいなどの家族も同行しており、合計で35名の参加があった。

1) アンケート結果(参加者)

質問項目の「今日のプログラムはいかがでしたか?」に対し、とてもおもしろかった20名(80%), おもしろかつ



図3. 講義の様子



図4. クイズでの振り返り



図5. 模型を使用しての演習



図6. 妊婦体験の演習



図7. 在住外国人女性と共にクッキータイム

た5名(20%)と回答者全員から高い評価を得た。また「プログラムはわかりやすかったですか?」に対しても午前、午後共に、とてもわかりやすかった21名(84%), わかりやすかった4名(16%)という回答であった。内容に対しては高い評価を得たが、参加への動機に関しては、先生や両親にすすめられたから15名(60%), 内容に興味があったから9名(36%), いとこにすすめられたから1名(4%)と、自主的に参加した人よりも促されて参加したの方が多かった。本研究事業の目的でもある科学や研究への興味関心が高まったか否かについては、「科学(学問)に興味がありましたか?」に対し、とても興味をわいた13名(52%), 少し興味をわいた12名(48%)と、興味をわかないと回答した人はいなかった。また「将来自分も研究してみたいと思いましたか?」には、とても思った12名(48%), できればしてみたいと思った10名

(40%), 思わなかった2名(8%), わからない1名(4%)で、88%が研究へ興味を持つことができたという結果であった。

自由記載には、「いろいろな文化を知れてよかった」と、多様性についての興味が高まったとともに、「命についてよくわかった」「お母さんがどんな気持ちで私を生んでくれたのかわかって感動した」という記述もあり、新たな命が生まれることの普遍性だけでなく、命に対する感受性が高まり、命の尊さを自分なりに理解できた参加者もいた。さらにプログラムに対し「スタッフがフレンドリーでよかった」「説明がわかりやすかった」という記述が複数あり、内容だけではなくプログラム全体への満足度も高い参加者も多かった。

2) アンケート結果(保護者)

アンケートの回答は24家族からあった。質問項目の「今日のプログラムはいかがでしたか?」に対し、とてもおもしろかった20名(83%), おもしろかった4名(17%)と参加者同様に高い評価であった。さらに「このような企画があればまた参加したいと思いますか?」に対しても、ぜひ参加したい20名(83%), できれば参加したい4名(17%)という結果であった。

自由記載には、今回のプログラムが参加者にとって良い学びの機会になったという記述が多かった。さらに「みんな違うことが当たり前で、違うことがその人の個性ということを忘れかけていたように思う。貴重な体験でした」や「見た目や出身国で決めつけず、心を開くこと、人々の素晴らしさを見つけること、学ぶことに終わりはない。どれも心に響く言葉でした」など保護者の学びにもなったという記述も多かった。またプログラム終了後に「毎年継続してほしい」「学校では得られない機会だと思うので本当によかった」と声をかけてくださる保護者もいた(図8)。

IV. 考察

2018年末の在留外国人数は、273万1,093人で、2017年末に比べ16万9,245人(6.6%)増加となり過去最高となった



図8. 閉校式

た。外国人人口の総数に占める在留資格「永住者」の人口は、2015年に70万人を超え、2018年には77万1,568人(28.3%)に達している²⁾。さらに、2017年の外国人の技能実習の適正な実施及び技能実習生の保護に関する法律(技能実習法)の施行³⁾や2018年の「出入国管理及び難民認定法及び法務省設置法の一部を改正する法律」の改正法⁴⁾によって、多様な背景を持つ生活者の定住の期間が長くなることが予測される。つまり、これからの社会はさらに多文化共生が加速し、子どもたちが学ぶ教育の場や就職する際には、同期者が日本出身者だけではない可能性がある。このような状況への準備としても今回のプログラムは、多文化共生への感受性を高める支援とも言える。統計上では在住外国人の人口が増えていると言っても、在住外国人はコミュニティの中での生活が主であったり、外国人集住地区に集中して居住していることもあったりし、日本人とのかかわりが少ない場合がある。そのため、多文化共生社会といっても、在住外国人とコミュニケーションをとる機会が少ないことの方が多いたが現状である。共に生活しながらお互いに学びあうという段階にまで到達していないため、意図的に多くの文化を学び今後の共生を考える機会を作る今回のプログラムは、これからの社会で生きていく子どもたちには必要であると考えられる。今後は、人口動態の変化から多文化共生とさえ表現しなくなるかもしれないが、その準備としても「苦手意識」を取り払う支援の必要があると強く思う。

さらに学習方法においても、本プログラムは学習者の主体性の向上に効果的であると言える。今回はチーム基盤型学習(TBL)の要素を取り入れアクティブラーニングを中心とした構成にしたが、自主的な参加ではなかった多くの参加者が、プログラムがおもしろかったと回答した。Society 5.0に向けた学校 ver.3.0は、「学びの時代」と位置付けられている⁵⁾。その中で、アクティブラーナーの育成のための新たな公教育の役割を、学習者が学校だけではなく社会や地域、大学など様々なリソースから主体的にプログラムを選択して学ぶことができ、その学びのまとめ役となるラーニングオーガナイザーとしている。様々な分野での学びの整理においてアクティブラーニングは有効であり、TBLをはじめとする学習方法を学校 ver.3.0でも積極的に取り入れていくと予測されるため、今回の学習方法は参加者の今後の学び方を体験する意味でも有効であったのではないかと思う。また、文部科学省は、Society 5.0における小・中学時代の学校の在り方として、「学校だけ」しか教育の場として認められなかった時代から、フリースクールや地域未来塾等「学校以外の場」での教育機会が確保される時代へ、それぞれ転換が求められる⁶⁾、としている。今後も学校以外の場としてプログラムを提供し、小・中学生の未来への支援をし

ていきたいと思う。

V. 今後の課題

本プログラムは子どもへのプログラムであったが、保護者も参加したことで、プログラムの後もそれぞれの家庭で多文化共生を親子で考えるきっかけを作ることができたと考える。今後の課題は、参加者がより主体的に参加できる工夫が必要である。例えば、事前の課題などを提示し、よりテーマに興味を持てるような検討をしていきたい。また、今回の参加者は男女の人数のバランスが均等ではなかったため、今後は男子も参加しやすいようなテーマや内容の提示などの工夫もしていきたい。今後も本プログラムを継続するとともに、対象の年齢層も変え各年齢層に合わせたプログラム内容の検討も課題である。

本事業は、2019年度ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～KAKENHI(課題番号:19HT0077)の助成を受けて行いました。

引用文献

- 1) ひらめき☆ときめきサイエンス. 日本学術振興会 [Internet]. <https://www.jsps.go.jp/hirameki/> [参照2019-08-28]
- 2) 平成30年末現在における在留外国人数について. 法務省入国管理局;平成31年3月22日 [Internet]. http://www.moj.go.jp/nyuukokukanri/kouhou/nyuukokukanri04_00081.html [参照2019-08-28]
- 3) 外国人技能実習制度とは. 公益財団法人国政研修協力機構 [Internet]. <https://www.jitco.or.jp/ja/regulation/> [参照2019-08-28]
- 4) 入管法及び法務省設置法改正について. 出入国在留管理庁 [Internet]. http://www.immi-moj.go.jp/hourei/h30_kaisei.html [参照2019-08-28]
- 5) 教員養成部会(第100回)配付資料8-3 Society 5.0に向けた学校 ver.3.0. 文部科学省教員教務部会;平成30年6月5日 [Internet]. http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/_icsFiles/afieldfile/2018/06/20/1406021_17.pdf [参照2019-08-28]
- 6) Society 5.0に向けた人材育成～社会が変わる, 学びが変わる～. Society 5.0に向けた人材育成に係る大臣懇談会新たな時代を豊かに生きる力の育成に関する省内タスクフォース;平成30年6月5日 [Internet]. http://www.mext.go.jp/component/a_menu/other/detail/_icsFiles/afieldfile/2018/06/06/1405844_002.pdf [参照2019-08-27]